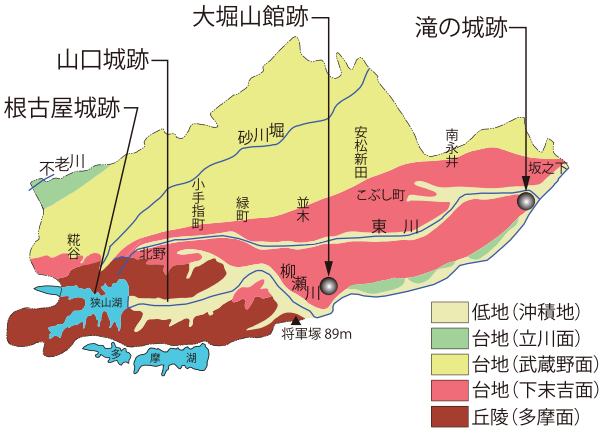
埼玉県指定史跡 滝の城跡

発掘調査概要

1．位置と概要

滝の城は、所沢市の東部、東川と柳瀬川の合流点に築かれており、本郭・二の郭・三の郭などから成る内郭と外郭・出郭等で構成される平山城です。規模は、東西 350m × 南北 200m ほどで、城の南側は高さ約 25m の急崖、北側は三重の堀や土塁によって守られています。

内郭は現在も遺構が良好に残されていることから、大正 14 年（1925）3 月 31 日に埼玉県の史跡として文化財指定された市内で最古の指定文化財です。



2．歴史と背景

滝の城は享徳（きょうとく）の乱（1455 ～ 1482）、長尾景春の乱（1477 ～ 1480）、長享（ちょうきょう）の乱（1487 ～ 1505）と関東一円での戦乱が相次ぐ中、15 世紀後半に築城された可能性が高いのですが、当時の城主については特定できていません。以前は山内上杉氏の家臣である大石氏が築城したという説もありましたが、近年では、享徳の乱の中で扇谷（おうぎがやつ）上杉氏が古河公方に対抗して築城した江戸・河越の 2 城を結ぶ“つなぎの城”として、滝の城が整備・拡充されたという考え方も出てきています。発掘調査でも扇谷上杉氏と関連付けられる「ウズマキかわらけ」が出土していることから、少なくとも同氏の勢力下に置かれた時期があったことは確かなようです。

山内上杉氏と扇谷上杉氏が対立した長享の乱終結後、相模国の小田原北条氏は武蔵国へ進出し、大永 4 年（1524）に江戸城、天文 6 年（1537）に河越城を奪います。両上杉氏は和睦し古河公方と共に小田原北条氏に対抗しましたが、天文 15 年（1546）の河越合戦で敗北し、扇谷上杉氏は滅亡、山内上杉氏は上野国へ撤退、滝の城は北条氏康の三男氏照の支配下に入ります。

永禄 3 年（1560）、越後国の長尾景虎（後の上杉謙信）は関東に侵攻し翌年には小田原城まで攻め込みます。氏康は景虎が越後国へ戻った後に支配領域を回復し、滝の城は反北条勢力で扇谷上杉氏の旧臣である太田資正の岩付城との“境目の城”として番所（清戸番所）が置かれるようになります。これについては、永禄 7 年（1564）5 月に発給された「清戸三番衆状」に、前年に攻略した勝沼・辛垣（からかい）城（現・東京都青梅市）の旧三田氏家臣に同番所を輪番で警護させていたことが記されています。同年 7 月、岩付城も小田原北条氏に降ると滝の城は“つなぎの城”として天正 5 年（1577）までの間の下野国方面への出兵の際に陣揃えの地になったといわれています（『小田原編年録』1812）。滝の城の外郭はこの時期に整備され、兵站基地として多くの兵が駐留できるように増築されたものと思われます。しかし、天正 18 年（1590）、豊臣秀吉による小田原攻めの際、浅野長政勢の北方からの攻撃を受け、滝の城は一日で落城したと伝わります（『新編武蔵風土記稿』1830）。

3．発掘調査の概要

滝の城跡では、これまで民間開発に伴う緊急発掘調査を計 11 回、史跡整備を目的とした学術調査を平成 23 年度から計 10 回行っています。

①畝堀（昭和 61 年度調査）

外郭と出郭を区画する部分において、クランク状の堀が 40m に渡り検出されました。堀の形状は、断面が逆台形の箱薬研堀で、上部幅 8 ～ 12m、底面幅 1.3 ～ 2.7m、深さ 5m、堀底は高さ 0.8 ～ 1.2m の低い畝で区画された堀でした。

ここは小田原北条氏時代に大手口があったと考えられている場所になります。

畝堀

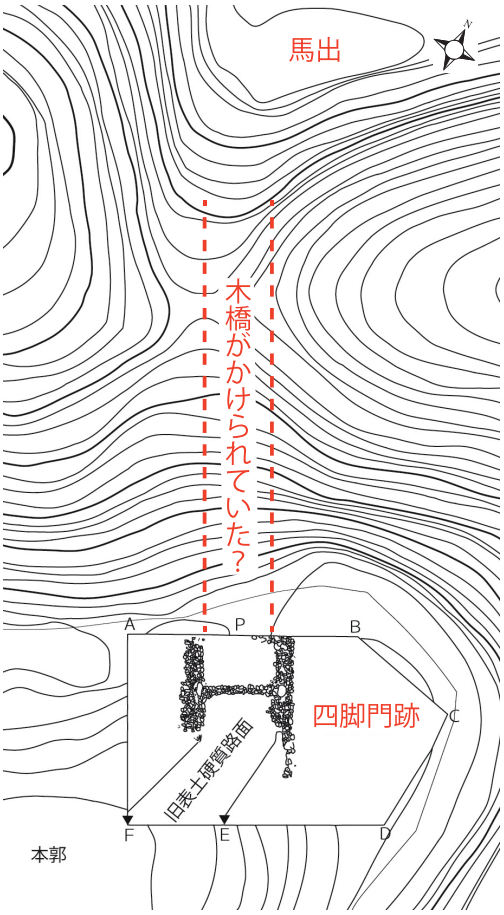
②畝堀（平成元年度調査）

外郭西辺にあたる部分において、堀が45mに渡り検出されました。堀の形状は、断面がV字形の薬研堀で、上部幅10m、底面幅0.4～2m、深さ7m、堀底は高さ1.4～2.5mの畝で区画された堀でした。

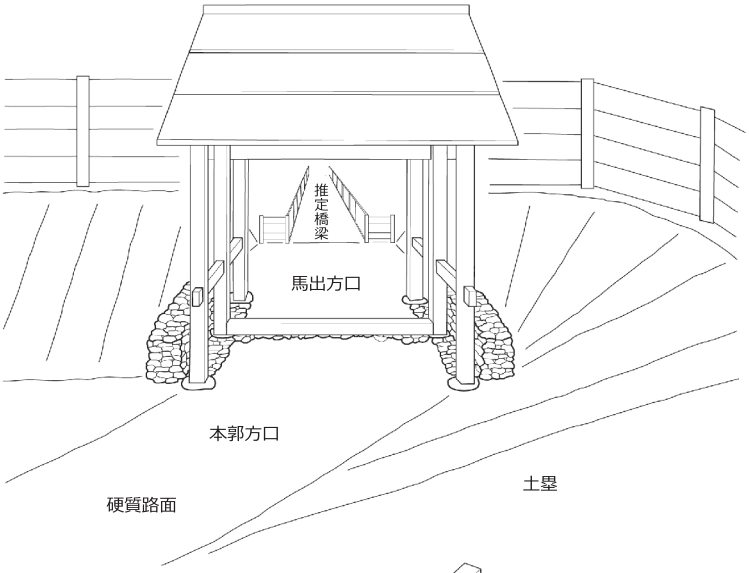
畝堀

③四脚門跡（平成2年度調査）

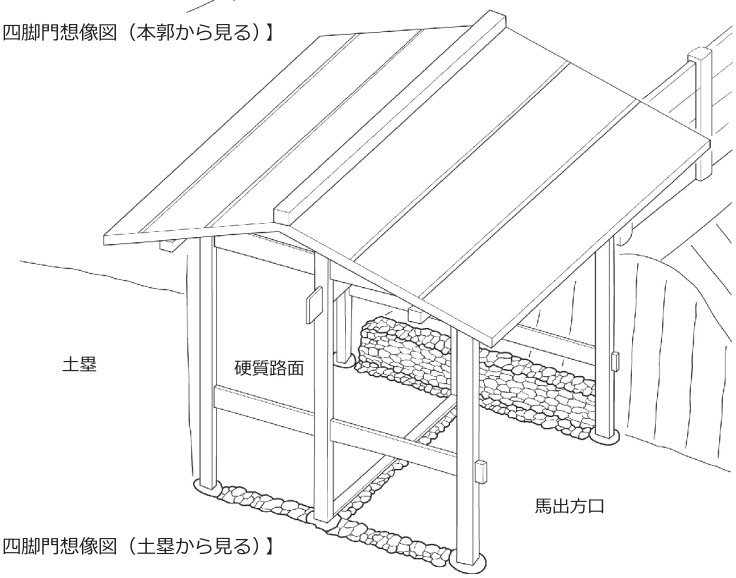
城山神社の社殿改修工事に伴い本郭の北半分で発掘調査が行われ、北東側の土塁の切れ目箇所から、H字形に礫を敷き詰めた四脚門跡の基礎が検出されました。地面に焼土が広がっていたことから門は焼失したと考えられ、門の部材と思われる炭化材や角釘・飾り金具なども出土しました。更に、四脚門跡の外側にある内堀がこの部分だけ土橋状に浅くなっていることから、対岸の馬出に向かって木橋が掛けられていたのではないかと考えられています。



四脚門跡の基礎



【四脚門想像図（本郭から見る）】



【四脚門想像図（土塁から見る）】

④畝堀（平成 16 年度調査）

外郭の北東隅において、直角に折れる堀が検出されました。堀の形状は、断面がＶ字形の薬研堀で、上部幅 11 ～ 12m、底面幅 0.2～1m、深さ 6～7m、堀底は高さ 2m、幅 0.5m の畝で区画された堀でした。

畝堀

⑤地鎮祭祀跡（平成 24 年度調査）

二の郭の調査で、当時の旧表土層に方形の掘込みがあることが確認されたため、調査範囲を広げたところ、2.25m × 1.35m の長方形の土坑（第 10 号土坑）を検出しました。また、その周囲からは複数の柱穴が見つかり、柱穴内からは「かわらけ」と「貝殻（ハマグリ）」、土坑の底面直上からは「鋸（のこぎり）」が出土しました。ハマグリの放射性炭素測定年代が 1422 ～ 1491 年までの範囲に高確率で収まる結果を示したことから、柱穴やそれに伴う土坑はこの期間のものである可能性が高いことが分かりました。土坑は二の郭の造成前に掘られ、その後埋め戻された形跡があり、複数の柱穴から簡易的な木造建物の存在が想定され、更には大工道具の鋸が出土していることなどから、築城に伴う地鎮祭祀跡と考えられます。

長方形の土坑と４本の柱穴

柱穴内から出土した「かわらけ」

土坑の底面直上から出土した鋸

⑥大井戸跡（平成 24 年度調査）

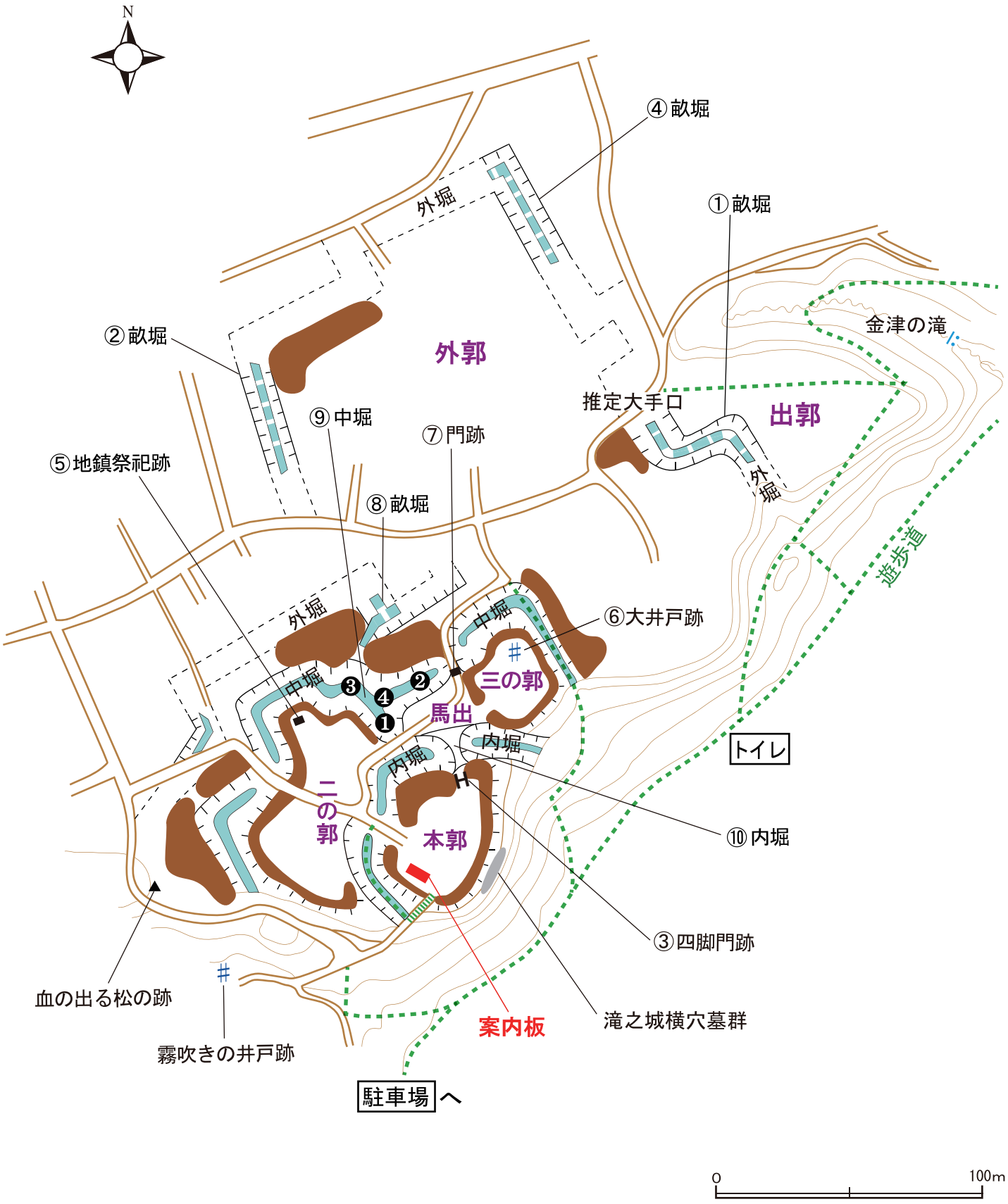
三の郭の不自然に凹んだ箇所を掘り下げたところ、直径約 10m の漏斗（ろうと）状で西側に６段の階段を伴う井戸跡を検出しました。調査時に深さ約 8.4m まで掘り下げましたが、井戸底まで達することはできず、安全上の観点から調査終了としました。三の郭は標高が高く、四方に堀が巡っていることから水脈も絶たれており、周囲の堀と同等又はそれ以上の深さまで掘らなければならなかったため、大きな井戸になったと思われます。もっと低い所で掘れば簡単に水は出たと思いますが、籠城戦（ろうじょうせん）に備えて敵の手に落ちにくい城の中心近くに井戸が必要だったものと考えられます。

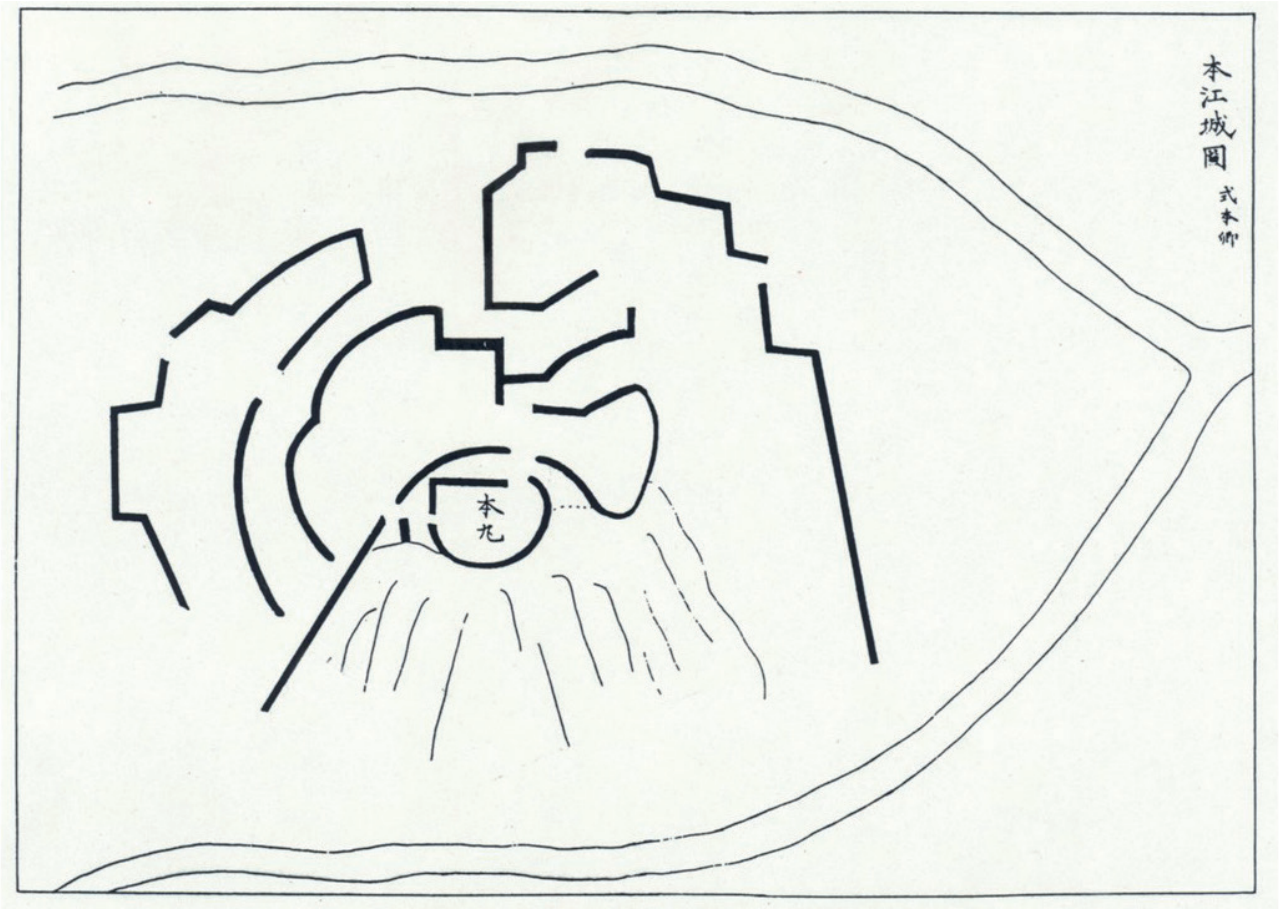
不自然に凹んだ箇所

６段からなる階段

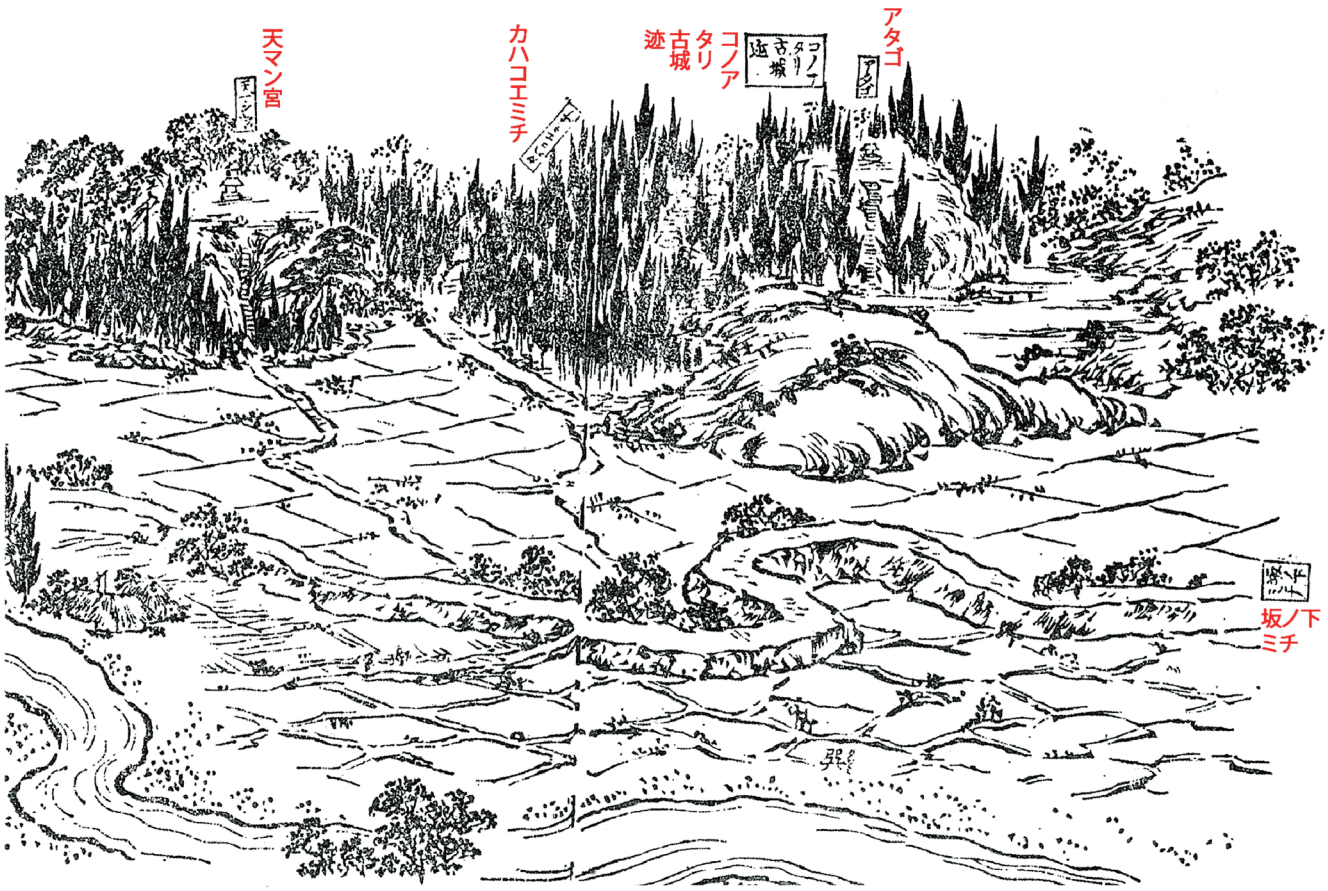
大井戸跡

滝の城跡　縄張り図


N
④畝堀
①畝堀
外堀
②畝堀
外郭
金津の滝
推定大手口
出郭
⑨中堀
⑦門跡
⑤地鎮祭祀跡
⑧畝堀
外堀
遊歩道
中堀
⑥大井戸跡
三の郭
馬出
内堀
トイレ
内堀
二の郭
本郭
⑩内堀
③四脚門跡
血の出る松の跡
滝之城横穴墓群
案内板
霧吹きの井戸跡
駐車場へ
0
100m



『小田原編年録』（本江城図）文化 9 年（1812）刊行　滝の城の縄張りを描いたものと思われます



『武蔵野話 続編』（城村）文化 10 年（1827）刊行　「アタゴ」と書かれている所が滝の城の本郭と思われます

⑦門跡（平成 24 年度調査）

現在の遊歩道では三の郭と馬出の間に当たる位置において、１列の石敷と７本の柱穴（ピット）が検出されました。また、1 辺約８～ 10㎝の炭化材（角材）と焼土が古い門柱跡の上から検出されました。このことから門は一度建て替えられ、建替え後の門は何らかの原因で焼失したことが分かりました。

また、扇谷上杉氏関連の城館跡で多く出土する、見込みに沈線渦巻きが施された「ウズマキかわらけ」が出土しています。

門跡の石畳

炭化した門の部材

ウズマキかわらけ

⑧畝堀（平成 28 年度調査）

２つの大型土塁に沿って外側（北側）から堀が検出されました。堀の形状は断面が逆台形の箱薬研堀で、上面幅約 3m、底面幅 2.2 ～ 2.9m、深さ 0.8 ～ 2.4m、堀底は高さ 0.7 ～ 1m の畝で区画された堀でした。

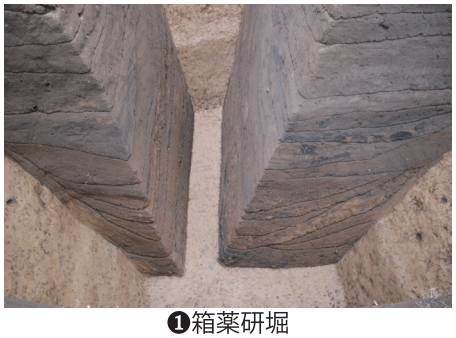
堀の下層は締まりのないローム粒子主体の土で、中層には黒色土とロームブロックの混合土が雑に入れられた感があり、人為的に埋め戻されたと思われます。

畝堀

⑨中堀（❶❷平成 29、❸令和 3、❹令和 4 年度調査）（4 ページ縄張り図の❶～❹が調査位置を示します）

❶南北の中堀と❷東西の中堀をＴ字形に掘り下げたところ、箱薬研堀が検出されました。堀底に畝はなく、ほぼ平滑で、深さは❶約 3.5m・❷約 3m を測りました。❷では堀底から約 1.5m 上がった付近に、後から法面を開削して構築された幅１.3m ほどの平場（テラス状遺構）が南側の法面にのみ存在しました。また、堀底近くから「ウズマキかわらけ」が出土しました。

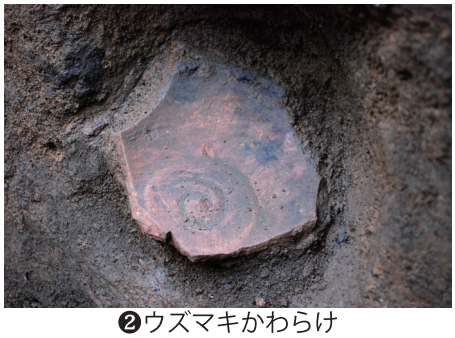
❶南北の中堀


❶箱薬研堀

❷東西の中堀（東側）

❷東西の中堀（西側）

❷南側法面の平場


❷ウズマキかわらけ

❸の箇所を掘り下げたところ、箱薬研堀が検出されました。南西と南東方向に延びる堀底に畝はなく、ほぼ平滑でしたが、堀がクランクしている地点で急激に約 45° ～ 60° の角度で落ち込んでいることが分かりました。作業途中で水が湧きだしてきたため掘下げを中止しましたが、測量用ピンポールを掘削面に刺して簡易計測したところ、一番低い箇所の堀底は現地表面から深さ約 3.4m、堀底幅は約 0.8 ～ 1m と推測されます。また、堀の覆土を観察したところ複数の硬化面を確認しました。

❸中堀（東側トレンチ）

❸中堀 クランク部分

❸中堀（西側トレンチ）

❶❷の堀が交錯する❹の箇所を掘り下げたところ、同様に箱薬研堀が検出されました。また、❷で検出した平場がこの箇所まで延伸していることを確認しました。

このほか、複数の硬化面と人為的に埋め戻したと考えられる堆積土を確認しました。先程の平場とほぼ同じ高さで堀が埋め戻され、その最上部が硬化していたことから、堀の幅を広げるとともに作業中に発生した土で既存の堀を埋め戻し、広く浅い堀に造り変えたと考えられます。埋戻し作業中に形成されたと思われる階段状の硬化面も見られました。

❹中堀（❶❷交差部）

❹延伸する平場と階段状に残った硬化面

❹南側法面の平場

⑩内堀（平成 31 年度調査）

本郭北側で検出された四脚門と馬出の間は土橋状の高まりがあり、内堀の中でも鞍部となっています。この場所を調査したところ、南北（本郭と馬出）両方側から内堀内部に凸形上に張り出すようにローム層（地山）を意図的に残して成形されていることが分かりました。また、複数の柱穴と人為的に盛土された硬化面を確認し、柱穴の一つはこの硬化面を掘り込んで造られていました。柱穴の存在から橋のような木製構造物が建てられていたと思われますが、硬化面よりも上層から多くの炭化物や礫が検出されたことから、この構造物は何らかの原因で焼失した可能性があります。

内堀（西側トレンチ）

内堀（東側トレンチ）

柱穴の跡が確認できる土層面

4．その他

(1) 城山神社

現在、本郭には城山神社が鎮座しています。

滝の城落城後は愛宕神社が祀られていましたが、明治 41 年に村内の天神・熊野・八幡社を合祀し、城跡の名をとって「城山神社」となりました。

(2) 霧吹きの井戸跡

滝の城跡西側の七曲坂を下りきった所に残る井戸跡です。

昔、井戸に竜が住んでいて、たびたび悪さをしたことから、村人たちは竜を退治するために、柳瀬川の対岸に舞台を作り、お祭り騒ぎをして竜をおびき出し、弓で射たという伝説があり、弘化 3 年（1846）建立の大峯大権現と刻まれた石塔があります。

(3) 血の出る松

滝の城跡西側の七曲坂の途中には、傷をつけると赤色の樹液が出るとされる大きな黒松が立っていました。その赤色から、落城した際に討ち死した城兵の血ではないかという言い伝えがあります。

昭和 47 年に松は枯れて伐採されましたが、跡地には「血の出る松の跡」の碑が立っています。

(4) 金津の滝

出郭と城外を画す小谷に、かつて「金津の滝」という滝がありました。この滝が「滝の城」の名の由来になったと伝わります。

(5) 滝之城横穴墓群

本郭の南斜面が崩れた際に擁壁補強工事を行ったところ、横穴が出現して、内部から人骨や副葬品が出土しました。

滝の城が築城されるおよそ 800 年前の古墳時代末の横穴墓です。

【交通アクセス】

◆ＪＲ武蔵野線「東所沢駅」下車 徒歩約 25 分
◆西武池袋線 / 新宿線「所沢駅」東口から
　西武バス（志木駅南口行き）「城」バス停下車
　徒歩 3 分
◆ところワゴン本郷・坂ノ下ルート「東所沢病院」
　下車すぐ
◆お車でお越しの際は、城跡の南側の「滝の城址公園」
　駐車場をご利用下さい。

【お問合せ】

〒 359-1152
所沢市北野二丁目 12 番地の 1
所沢市教育委員会 文化財保護課 (埋蔵文化財調査センター)
TEL 04-2947-0012
発行日／令和 8 年 3 月 31 日